VIAGGIO IN ITALY
大森愛子のイタリア紀行
AIKO OMORI PRESENTI

5

2014.7.20

映画都市 CINECITTA チネチッタ

イタリアを舞台とした映画は数多くありますが、やはり筆頭に挙げるとすれば「ローマの休日」でしょうか。ローマの観光名所を背景に、オードリー・ヘップバーン演じるアン王女のひとときの恋を描いた不朽の名作。観光地としてローマがこれほど多くの人で賑わうようになったのもこの映画のおかげといえるかもしれません。真実の口、スペイン広場、トレヴィの泉など、映画のロケ地となった場所では、今でも毎日のようにアン王女さながらのポーズで写真撮影をする人の姿が見られます。「ローマの休日」の他にも、「戦争と平和」「ベン・ハー」「甘い生活」「クレオパトラ」「山猫」など、名だたる名画の製作の中心となったのは、ローマ郊外にあるCINECITTA(チネチッタ) という撮影所でした。イタリア語で「映画都市」を意味するチネチッタが建設されたのは1930年代のこと。当時イタリアの指導者であったムッソリーニのファシズム政権の下、都市計画の一環としてローマ南方にある荒野に建設が進められました。イタリア最大、ヨーロッパでも最大級の規模を誇る広大な敷地内には映画セットやフィルム編集設備など映画制作に必要な物はすべて備えられており、まさに映画都市と呼ぶのにふさわしい場所。これまでに3000本を越える映画のさまざまなシーンが撮影されており、近年では日本映画「テルマエ・ロマエ」のロケ地となったことでも知られています。
1937年の開所以来イタリア映画の黄金時代を支えてきたチネチッタですが、現在はテレビドラマ、コマーシャル、ミュージックビデオなどの撮影に使われることが多いそうで、日本と同じくテレビやその他の娯楽の普及によって衰退傾向にあるイタリア映画界においては、チネチッタが映画撮影に使用される機会も減っているようです。

王女がジェラートを食べるシーンで使われたスペイン広場

観光スポットになっている現在は、遺産保護のため階段での飲食は禁止。映画のマネはできません。

今日の映画館

庶民の娯楽の代表格が映画だった時代は過ぎたのかもしれませんが、映画館で映画を見る楽しさは何にも代えがたいものです。
イタリアでは映画館へは夕方から深夜にかけて行くのが一般的なので、多くの映画の開始時間は夕方過ぎになります。ローマでは午前中の上映はほとんど無く、お昼を過ぎたころからやっと子ども向け作品の上映がぽつぽつと始まり、夕食前の18時ごろから夕食後の22時過ぎに上映される作品が最も多くなります。日本

映画撮影所 チネチッタ

では上映開始時刻が夜20時か21時以降になるレイトショーは通常より安い料金で観賞できることが多くなりますが、イタリアでは上映開始時間が遅いほど料金は高くなり、時間帯による割引が日本とは真逆になるのは興味深いところです。
料金は映画館によって多少異なりますが、ローマ市内では8.5ユーロ程です。さらに子ども割引やシニア割引、曜日ごとの割引などが適用されますが、もし平日のお昼過ぎに映画館へ立ち寄ることができればラッキー。人入りの少ない平日の18時前に始まる映画は割引が適用されていることが多いので、あまり混んでいない館内で6ユーロ弱（800円ほど）で映画が楽しめます。
特に人気が集まる作品は日本と同じくハリウッド大作やCGアニメ作品ですが、日本のアニメーション作品もイタリアでは人気があります。イタリアでの日本アニメの人気は想像をはるかに超えるほど。おそらく最もイタリアに溶け込んでいる日本文化はアニメだといえるでしょう。「ドラゴンボール」「ルパン三世」「ドラえもん」「ワンピース」このあたりはイタリア人なら誰もが知っている作品。その他にも、「キャプテン翼」「北斗の拳」「セーラームーン」「ナルト」「名探偵コナン」など、イタリアで人気のあるアニメを挙げればキリがありません。スタジオジブリのアニメ作品も度々国営テレビで放映されています。アニメと連動して漫画の人気も高く、日本のコミックの売り上げは本国イタリアのものよりも多いとか。確かに書店には数多くの日本の漫画が並んでおり、その品揃えは感心するほどです。若い人の中にはアニメや漫画を通して日本文化に興味を持つ人が増えており、登場人物が食べていたからという理由で、ラーメンやお弁当などの日本食に興味を持っているイタリア人はとても多いのです。
まださほど知名度の高くない作品は1日～3日の短期間限定で上映されることが多く、日本アニメの中で、最近では「千と千尋の神隠し」や「劇場版 魔法少女まどか☆マギカ」などが公開されていました。期間限定上映といっても、これらはイタリアでは最大級の映画館運営会社であるUCI Cinemasでの上映ですので、決して少数のマニア層を狙っているわけではありません。私もUCI Cinemasで初めて見た作品は「エヴァンゲリオン劇場版」でした。見覚えのある上映予告のポスターを街で見かけたときは驚きましたが、イタリアの国営テレビでもこのアニメが放送されていたことを知ってさらに驚きました。当日の館内も満席。日本のアニメは本当に人気があり、やや愛好者を選ぶような作品でも、好奇心と寛容性をもって受け入れる土壌があることを嬉しく思います。

たくさんの日本アニメがTV放送されています。タイガーマスク二世。

書店に並ぶ日本の漫画

一冊6～8ユーロくらい

VIAGGIO IN ITALY
大森愛子のイタリア紀行
AIKO OMORI PRESENTI

全ての映画は吹替版

イタリアの映画館ではいくつか日本とは異なる点があります。
まずひとつめは、台詞が全てイタリア語に吹き替えられていること。全ての輸入映画はイタリア語に吹き返られてからの上映となるため、字幕付きで観賞するという選択肢はありません。著名なハリウッドスターには固定の吹き替え俳優がついていることもあるそうで、お気に入りのハリウッドスターの生の声を聞いた事がないとうイタリア人さえいるのです。
さらに特徴的なのは、映画の途中で必ず小休止がはさまれること。上映時間の長さに関わらず、90分ほどの短い映画でも半分ほど過ぎたところで不意に画面が黒くなり、5～10分ほどの休憩時間が設けられます。制作者側はこの途中休憩を意識して編集をしているわけではないので、中断される箇所は映画館の任意。たとえ主人公の愛の告白の途中であろうと、わが子の生死にかかわる局面が訪れていようと、それが上映時間のちょうど半分を過ぎたころであれば、無慈悲にぶっつりと中断させられてしまうのです。そのため観客席からは、「おい！」「何で今なんだ！」と不満の声があがることもしばしば。とはいえ映画館で小休止がはさまれるのは当然のことなので、誰も本気で文句を言ったりはせずに、その間にお手洗いに立ったりお喋りをしたりしてしばしの時を過ごします。この不思議な習慣は、オペラが生まれたこの国ならでは、映画館においても幕間の習慣が根付いているのかな、と勝手に思っていたのですが、単にイタリア人の集中力がそんなに長く続かないからだと言う人もいて、果たして90分の映画の途中で5分間の少憩が必要なのかはよく分からないままです。しかし休憩に入るやいなや、待ってましたとばかりにこれまでの内容について周りと話し合う人々を見ていると、彼らにとっては映画そのものより、映画を通して周りと時間を共有し、共感し合うということの方が重要なのだろうと思えてくるのです。その後の展開をより期待に満ちたものにしようとするその5分間の時間の使い方は実に見事なものです。映画が終わると観客席からはパラパラと聞こえる拍手の音。反応のない映像に対して拍手することは無意味でしょうか。彼らは誰に伝えるわけでなくとも、自分の感動を素直に行動で表すことで、より豊かな時間を過ごそうとしているように思えます。
8月になるとバカンスのため観光地以外にある施設やレストランはことごとくお休み、ますます映画館へ足を運ぶ機会が増えそうです。

街で見かけたエヴァンゲリオンのポスター

9月には宮崎駿 監督の
「風立ちぬ」が公開されるようです

券売所